

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 福島真人

福島真人氏の論文は、インドネシア、ジャワ島北岸部農村でのほぼ2年間に及ぶフィールドワークにもとづき、そこに見いだされる3つのタイプの宗教事例を比較考察するものである。そして、社会の諸制度への分化のなかでの宗教システム存在のあり方を、先行の諸社会理論、とりわけルーマンの社会分化論に照らして検討している。したがってそれは1980年代のインドネシア一地域社会をめぐる民族誌研究であり、また宗教システムを一般社会理論の中に位置づける理論的考察でもある。

日本国内でもまた国際的にも、ジャワ社会をめぐる文化人類学的研究はかつてのマタラム王国に連なる2つの旧王都スラカルタ、ジャクジャカルタ地域に偏っている。そこでは、神々の秩序を地上に写した模範的中心としての王と王宮というモデルが強い影響力を持っていた。これに対し本論文は、こうしたモデルの規定力から距離があり相対的に独自の社会構成を示すジャワ北岸地域を取り上げた点で、インドネシア研究の欠を埋めるオリジナルな価値を持つ。王宮モデルの宗教論に対する批判として従来あったのはイスラム世界の一部としてのジャワという視点であった。それが反対命題を対置することに終っていたのに対し、本論文は3事例の一つとして正統派イスラムの活動も取り上げつつ、より広い視野を提示している。いわば「ジャワ国粋主義」的な近代の新興宗教であるクバティナン諸派、さらには思想的にまったく独自でラディカルな農民の宗教サミニズムがイスラムと併置して論じられることにより、一元的な見方には集約し得ない近代ジャワの錯綜した宗教状況が、説得力をもって提示されている。とりわけサミニズムの信条と実践についてはこれまで国際的に民族誌的研究を欠いており、歴史学者、政治学者などが植民地史料から臆測を展開するに止まっていた。人としての活動を農耕と夫婦の性の営みのみにぎりぎりまで簡略化し、外部の権威・権力を認めず、語ることによってのみ世界が存在するという独自の哲学をもって特異なジャワ語の用法を展開するサミニスト農民の姿を明快に示した点で本論文は大きな価値をもつ。このサミニズムの記述に止まらず、本論文は民族誌記述のきわめて高い水準を達成している。それは福島氏が、人々の活動を傍見し語ることを聞くというフィールドワークの基礎に止まらず、現地の人々との徹底した議論のやりとりを成しているからであり、それを可能にしたのは氏のきわめて高度な口語ジャワ語活用能

力と対話能力である。

3つの異なる事例を取り上げた本論文の宗教民族誌的記述に一貫性を与えているのは、宗教と政治の緊張し錯綜した関係を解きほぐそうとする視座である。インドネシア国家は憲法にも先行する国の基本原則として、第1条「唯一の神性」にはじまる5原則パンチャ・シラをもっている。これにより国民は国家が公認した5つの宗教のいずれかの信徒であることを義務づけられる。これは宗教を重視する立場とも言えるが、政治の側から宗教を規定しその管理の枠内に閉じこめようとする結果をも伴う。公認5宗教の内に入らないクバティナン、サミニズムは言うまでもなくイスラムにとっても、政治の介入に対し宗教の独自性と全体性を守るのは、困難な錯綜した作業である。こうした事態に対しそれぞれの信仰の側でいかなる対抗や妥協が行われているかを明らかにし、それぞれの対応に相似型や鏡像を見いだしていく作業は、本論文の民族誌記述中白眉とも言うべき興味深い箇所である。

本論文の民族誌的記述・分析は「社会の複雑化・諸システムへの分化の中で宗教はいかなる位置をしめ他のシステムといかなる関係を結ぶか」という、より一般的な問いに基礎づけられている。それはまた現代社会における宗教研究の可能性をどこに見いだすかという模索でもある。論文が直面している経験的状況は、宗教と社会が未分化に一体化したデュルケーム的状况ではなく、また宗教が政治・法・日常社会規範などから分離されて小さな閉ざされた区画に納まってしまうという「世俗化論」的状况でもない。そこで福島氏の議論に理論的出発点を与えているのは、ルーマンによる社会の自立した諸システムへの分化の理論である。極度に抽象性が高く文化人類学者に省みられることがなかったルーマンの理論に着目した独創性と挑戦的姿勢は大いに注目に値する。本論文は、初期ルーマンが示唆する宗教システム論、すなわち宗教が社会全体の中で局所化されつつ、なおそれに甘んじえずある種の全体性を要求し、それが故に固有の困難を抱えるという議論を経験的事象に適用し、ジャワの3つの事例を通じて豊かにすることに成功している。それゆえ論文は、個別・特異な宗教事象の記述といったことに止まらず、現代世界の宗教状況への普遍性を持った文化人類学的回答を提示することに成功している。

以上、審査委員会は一致して、本論文がジャワ社会の宗教的民族誌として先行研究の水準を超える高い水準を達成したものであり、宗教と社会をめぐる理論的課題にも新たな水準を開くものと認め、博士の学位を与えるに十分な、それも特にすぐれたものと認定した。